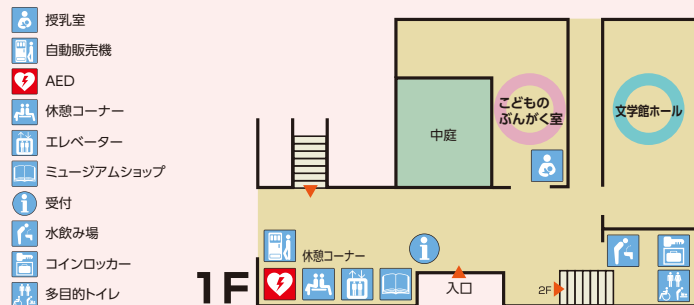




みんなあつまれ！こどものぶんがく室



土佐民話は、おおらかな南国の風土の中、愉快な話や個性的な妖怪が登場します。また、高知には、田島征三さん、征彦さんをはじめ、たくさんの児童文学者がいます。伝え続けたい民話の世界や児童文学をお楽しみください。



ホール



茶室「慶雲庵」

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時（入館は、午後4時30分まで）

休館日 年末年始（12月27日～1月1日）
※その他メンテナンス等で臨時休館となる場合があります

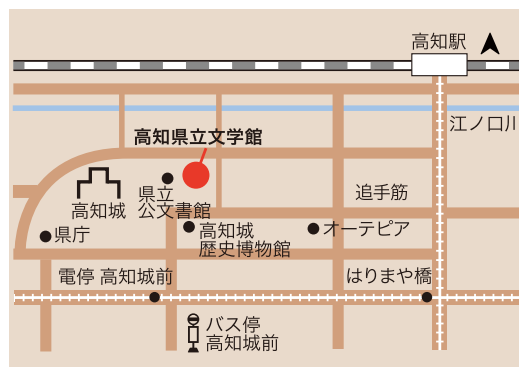
観覧料 ●企画展開催期間（常設展含む）…企画展ごとに異なります
●企画展を開催していない期間（常設展のみ）…一般400円

- ・20名以上の団体は2割引
- ・高校生以下無料
- ・身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、戦傷病者手帳、被爆者健康手帳をお持ちの方とその介護者（1名）、高知県・高知市長寿手帳をお持ちの方は無料
- ※窓口で手帳等のご提示をお願いする場合があります

駐車場 なし ※近隣に有料駐車場があります

貸出施設 企画展示室、ホール、茶室「慶雲庵」

交通案内 ・とさでん交通バス・路面電車「高知城前」から徒歩5分
・JR 高知駅から徒歩 20 分（またはとさでん交通バス・路面電車を利用）
・高知龍馬空港から空港連絡バス「北はりまや橋」下車、徒歩 20 分



文学館キャラクター
びった
しおり＆筆太



高 知 県 立
文 学 館

〒780-0850
高知県高知市丸ノ内1丁目1-20
電 話 088-822-0231 FAX 088-871-7857
e-mail bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp
https://www.kochi-bungaku.com
(運営:公益財団法人高知県文化財団)



2025.4

高知県立文学館



KOCHI LITERARY MUSEUM



高知県立文学館のご案内

南の雄大な太平洋と北の険しい四国山地にかこまれた南国土佐。この独特な風土の中からは多くの文学者が育ち、わが国の文学に大きな足跡を残しました。高知の作家から生み出された多くの作品は、土佐の歴史と風土を内包し、高知の文学ともいえる特色を備えています。

高知県立文学館は、こうした多くの作家と高知ゆかりの作家たちの文学資料を収集保存し、その業績を顕彰し、展示等をととして文学への関心と理解を深めていただくために、1997（平成9）年に開館しました。

常設展では、多士済々な高知の文学者について、「古典文学・近世文学」、「自由民権運動と文学」、「反骨の大衆文学」、「現代の文学」、「近現代の詩歌」、「高知ゆかりの作家たち」、「現在の作家」、「宮尾文学の世界」、「寺田寅彦記念室」、折々にテーマを変える「企画コーナー」など時代やテーマに沿って紹介しています。

また、民話や児童文学を中心とした「みんなあつまれ！こどものぶんがく室」があります。高知ゆかりの児童書、土佐民話の第一人者である市原麟一郎さんの著書を閲覧できるようにしています。さらに、手づくりの民話の紙芝居などを実演しています。

あわせて、内外のすぐれた文学を紹介する企画展や文学講座等の開催、出張講座やレファレンス事業などをととして、様々な文学の魅力をお伝えすべく情報提供をおこなっています。



「高知と文学者たち」入口



「宮尾文学の世界」

寺田寅彦記念室



常設展 高知と文学者たち

古典文学・近世文学



●土佐日記 紀貫之(未詳～945)
『土佐日記』は、930(延長8)年、土佐守に任ぜられた貫之が、任を終えた934(承平4)年暮れからの帰京の旅の歌日記で、女性に仮託して仮名書きで作品化されています。歌論を織り交ぜつつ、土佐でなくした愛娘への哀惜と、都への望郷の思いが描かれています。



義堂周信
(1325～1388)



絶海中津
(1336～1405)



鹿持雅澄
(1791～1858)

●五山文学 義堂周信 絶海中津

五台山吸江庵の禅林文学は、14・15世紀の土佐の文学の中心でしたが、その吸江庵の創設者が夢窓疎石です。義堂は、絶海と並んで夢窓の法嗣であり、五山文学の最高峰として、吸江庵の詩を残しています。絶海も五山文学の頂点に位置する禅僧詩人で、明に留学中、高皇帝から和韻の詩を賜ったことは有名です。

●鹿持雅澄

『万葉集』にかけた人生の集大成『万葉集古義』は、没後、明治天皇のご下賜金で出版された、独創的注釈も多い万葉集研究の大著です。

近現代の詩歌



岡本弥太
(1899～1942)



榎村浩
(1912～1938)



片山敏彦
(1898～1961)



上田秋夫
(1899～1995)

高知の近現代詩は1920年代後半、岡本弥太らの雑誌「ゴルゴダ」「麗詩仙」「青騎兵」などで始まりました。

1930年代に入り、榎村浩らを中心とするプロレタリア詩人たち

も、ファシズムに抗する良質の詩を生みました。同時代、片山敏彦、上田秋夫のロマン・ロランとの交遊、主知的な詩や評論、翻訳がありました。また、大江満雄の四万十川への望郷の詩も忘れがたいものがあります。

一方、島崎曙海らは中国東北(満州)で、高知の風土と異風の詩を残しています。橋田東声と北見志保子は万葉の伝統をひく作風で、近代短歌に足跡を残し、若尾瀾水、浜田波静は子規の俳句観に沿いながら、高知の近代俳句への道をひらきました。



大江満雄
(1906～1991)



島崎曙海
(1907～1963)



橋田東声
(1886～1930)



北見志保子
(1885～1955)



若尾瀾水
(1877～1961)



浜田波静
(1870～1923)

自由民権運動と文学

自由民権運動は、明治初期の専制政治を排して、国会・憲法をつくり、政治的自由と民権を求めようとした全国的な政治運動でありましたが、この運動のなかで、小説・新体詩・評論・和歌・俳句など、広い分野にわたってさまざまな文学作品が生み出されました。なかでも、「自由は土佐の山間より出づ」といわれただけに、自由民権運動文学は、高知出身者の手になるものが多く残っています。主なものに、宮崎夢柳の『自由の凱歌』、植木枝盛の『自由詞林』、坂崎紫瀾の『汗血千里駒』、中江兆民の『三酔人経綸問答』があり、これらの文学の流れをひくものに、幸徳秋水・田岡嶺雲などの文学があります。



宮崎夢柳
(1855～1889)



植木枝盛
(1857～1892)



坂崎紫瀾
(1853～1913)



中江兆民
(1847～1901)



幸徳秋水
(1871～1911)



田岡嶺雲
(1870～1912)



高知ゆかりの作家たち



吉井勇
(1886～1960)



井伏鱒二
(1898～1993)



大岡昇平
(1909～1988)



司馬遼太郎
(1923～1996)



高浜虚子
(1874～1959)

吉井勇は、香美市香北町猪野々に隠棲。そこで新しい歌境を開くなど高知は再生の地となっています。井伏鱒二は、人生の哀歓が漂う珠玉の短編『へんろう宿』や直木賞受賞作『ジョン万次郎漂流記』など、高知ゆかりの作品を残しています。大岡昇平は、歴史を文学に昇華させた骨格の太い歴史小説として評価が高い長編小説『天竺組』『堺港攘夷始末』を描いています。司馬遼太郎は、『竜馬がゆく』『功名が辻』『夏草の賦』など土佐を題材とした多くの作品を書いています。また度々来高し、名誉高知果人として広く県民に親しまれています。高浜虚子は、二度の来高をとおして、高知の俳句界発展のために大きな刺激と影響を与えました。

〈作家の写真について〉	鹿持 雅澄…当館寄託	大原 富枝…大原富枝文学館蔵	坂東眞砂子…個人蔵
	浜本 浩…B.M.Booth.Major,1952	安岡肇太郎…提供：神奈川近代文学館	司馬遼太郎…提供：司馬遼太郎記念館 撮影：井上博道
	上林 暁…上林暁文学館蔵	倉橋由美子…@Shinchosha	宮尾登美子…『新刊ニュース』1979年4月号(トーハン) 掲載の「私の近況」より

反骨の大衆文学

高知出身の大衆文学の作者は、探偵小説家と大衆小説家の二系列に大別され、それぞれに中央文壇で活躍しています。彼らの作品に共通するのは破邪顕正の反骨精神です。



黒岩涙香
(1862～1920)



田中貢太郎
(1880～1941)



浜本浩
(1890～1959)

黒岩涙香は、「万朝報」の経営に成功し、「新聞王」の名をほしいままにしました。また、わが国に多くの海外探偵小説を紹介しました。

大町桂月は、『美文韻文花紅葉』で脚光を浴び硬派の評論家と称されました。酒と旅を愛し、青森県の蕨温泉で死去しました。

田中貢太郎は、『旋風時代』の成功で大衆小説に一時代を画し、月刊随筆「博浪沙」を通じて井伏鱒二、田岡典夫、浜本浩などを育てました。田岡典夫は、土佐武士の心の機微を描いて1943年に直木賞を受賞。晩年の大作に『小説野中兼山』があります。

浜本浩は、雑誌「改造」記者から大衆作家になり、『浅草の灯』『旅順』など力作を残しました。馬場孤蝶は、「文学界」を中心に活躍。樋口一葉らとも交流があり、大陸文学を熱心に翻訳紹介しました。

森下雨村は、「新青年」初代編集長として江戸川乱歩らを発掘した、わが国探偵小説育ての親です。



大町桂月
(1869～1925)



田岡典夫
(1908～1982)



馬場孤蝶
(1869～1940)



森下雨村
(1890～1965)

現在の作家

山本一力(1948～)は、『あかね空』で直木賞受賞。豊富な人生経験を生かし、人情味のある時代小説を書いています。嶋岡晨(1932～)は、『乾杯』で小熊秀雄賞を受賞。詩人としてのみならず、評論や史伝等、幅広い分野で活躍しています。志水辰夫(1936～)は、志水節とも言われる切れのよい文体で、ハードボイルドや時代小説を執筆しています。有川ひろ(1972～)は、『県庁おもてなし課』『図書館戦争』シリーズ等を執筆し、幅広い年齢層に支持されています。西澤保彦(1960～)は、『聯殺』等、ミステリーとSFの要素を合わせた独自の作品世界を展開しています。藤原緋砂子(1947～)は、「隅田川御用帳」シリーズ等、人情時代小説の名手として高く評価されています。畠中恵(1959～)は、「しゃげく」シリーズ等で幅広い読者の支持を得ています。中脇初枝(1974～)は、高校生の時に「魚のように」でデビュー、『きみはいい子』等を執筆する傍ら昔話の語りなども行っています。吉田類(1949～)は、俳句愛好会「舟」を主宰。酒場詩人と称されTVでも活躍。辻堂魁(1948～)は、「風の市兵衛」シリーズ等、趣深い作風と剣戟が好評。

現代の文学



田中英光
(1913～1949)



上林暁
(1902～1980)



小高いと子
(1901～1989)



安岡章太郎
(1920～2013)



倉橋由美子
(1935～2005)

田中英光は、オリンピック・ロサンゼルス大会の出場体験を書いた『オリムポスの果実』でデビュー。晩年は無頼派作家と称されました。タクラ・テルは、民衆のための文学をめざした不撓不屈の作家で、『箱根用水』は代表作です。

上林暁は、身内や自身の病氣と闘いながらも、文学への執念を貫き、『聖ヨハネ病院にて』などの病妻もので文壇に地歩を築きました。

田宮虎彦は、暗い時代と自己の体験を、優れた歴史小説と愛の文学に結晶させました。

小高いと子は、女性の生き方を正面からヒューマニズム豊かに描いた直木賞作家です。

大原富枝は、『婉という女』をはじめ時代や運命に翻弄されながらも、ひたむきに生きた女を描き続けました。

安岡章太郎は、鋭い批評眼と豊かなユーモア、「第三の新人」の旗手として、戦後文壇に清新な衝撃を与えた芥川賞作家です。

清岡卓行は、鋭い感性と深い思索を持つ詩人で、芥川賞作家です。

倉橋由美子は、『パルタイ』での鮮烈なデビュー後、知的でドライな視点と独特の文体で作品を発表。翻訳にも優れた作家です。

坂東眞砂子は、土俗的・怪奇的小説が多く、『死国』『狗神』等、四国や高知を舞台とした作品も見られます。



タクラ・テル
(1891～1986)



田宮虎彦
(1911～1988)



大原富枝
(1912～2000)



清岡卓行
(1922～2006)



坂東眞砂子
(1958～2014)

寺田寅彦記念室

物理学者、随筆家。両親が高知県出身で、自身も少年時代を高知で過ごしました。物理学者としてX線や防災の研究を行い、「天災は忘れられた頃来る」の言葉でも知られています。また、夏目漱石に文才を見いだされた寅彦の随筆は、科学者の観察・発見・分析と、詩人の直観・連想・詩情が渾然と融合し、随筆の世界に新しい分野を切り拓きました。



寺田寅彦
(1878～1935)

宮尾文学の世界

高知市出身。「手織り木綿あるいは紬のよう」と評された代表作『襷』をはじめ、数々の作品で、日本的な風土や因習の中でしなやかに生きる女性の姿を丁寧に描きました。直木賞他さまざまな賞を受賞しています。



宮尾登美子
(1926～2014)